

浮かぶアートの森

新しく整備されるミュージアムロードは、南北に一つにつながって人が集まり、文化が育まれる場所になってほしいという思いからデザインを考えました。

一方で、そこにはすでに街があり、人々が暮らし、生活の場所となっています。

新しいミュージアムロードには統一するシンボルとしてたくさんの樹々を植えて歩行者専用の道としたいと考えています。

車を気にすることなく、樹々の間を散歩できます。そこには地域のコミュニティスペースや店舗が点在し、多くの人が集まれる広場もつくられ、季節に応じた様々なイベントが開かれます。

周辺にある文化施設との関係も育む場所としても役立つと考えています。ミュージアムロードの中に文化施設のアンテナショップが設けられ、イベント周知やワークショップを行うことが可能となります。

地域に暮らす人々や、周辺の文化施設の活動のみならず、そこに新たな店や貸しスペースやアートレジデンスが作られ、そこに訪れる来訪者も交えて、様々な文化の交流が生まれることを期待しています。

森のように樹々が配置された道は、地域の交通網に応じて地面から離れ・空に浮かび、さらに先の道へと繋がります。

生活のために街の車の往來を優先したいところ、JR灘駅の高架が横切るところがそれにあたります。

地面から浮いた森が続くことで、これまで見ることのなかった景色を得ることができます。

そのような場所に店舗スペースを構えることで、場所の特徴・オリジナル性をもたせた他に類のない店作りをすることが可能となります。

コミュニティスペースは、地域ごとに使いやすいようにエリアに点在させ、地域のこれまでの交流をさらに活性化させる場所を作ることができると考えています。

街の人々にとって誇りとなるような場所になることで、森を中心に地域の暮らしに豊かさを加えることができるのではないのでしょうか。

来訪者は、浮かぶアートの森を散歩し、そこで行われる文化的な活動にふれ、点在する店舗で過ごし、また訪れる。

貸しスタジオやテナントスペースを通じて、経済が活性化され、森がつながることの意味に深みが増す。

地域の人々は、日頃地域の仲間と交流を育み、これからの街づくりに参加していく。

このような未来を想像しています。

王子公園

アートの森の始まり

集会所
(コミュニティスペース)

阪急線

灘駅前拱橋

車の往來をなくす

山手幹線道路

阪急線

車の往來をなくす

●主な課題

現在のミュージアムロードは、道路や駅などによって分断されており、自動車交通が優先された空間となっているため、「ミュージアムロード」としての明確さや認識のしやすさに欠けていると感じます。点在する文化・芸術施設を一体的につなぐ明確なテーマや連続性が感じられません。

また、各施設間の距離が長く、案内やサインも少ないため、特に初めて訪れる人にとっては移動や目的地の把握が難しい状況であると考えました。

特にJR灘駅はミュージアムロードの南北を明確に分断しています。駅を介した南北の移動には自然さや連続性がなく、街全体の一体感を損なっているとも感じます。

街路空間には緑や日陰、滞留のためのエリアが少なく、歩行者にとっては快適さや安全性が十分とは言えません。気軽に立ち寄れるような商業施設も限られています。座る場所や滞在できる空間が少ないため、ミュージアムロードは主に通過のための空間として利用されており、人々が滞在し、時間を過ごすことのできる空間にはなっていません。

全体としてミュージアムロードには、文化・芸術施設を結びつける統一性のある強いテーマと、ここを訪れる人々のための、都市空間としての機能が必要だと考えます。

横尾忠則現代美術館
原田の森ギャラリー



アートの森の始まり イメージ

●エリア1
王子公園～JR灘駅

ミュージアムロードの起点となる王子公園の南側において、一部の車の通りを無くすことを検討します。そして、歩行者・自然・芸術が道路空間の中心となります。これはイベント等に合わせた一時的に行うものではなく、これからのミュージアムロードの文化軸を形成するための出発点です。

車通りがなくなることで、公園的な「アートの森」へと姿を変え、北側の王子公園と連続します。既存および計画の緑の構造がミュージアムロードの計画と結びつき、かつてこの場所にあった原田の森の記憶は、時間をかけて少しずつ、ミュージアムロードにできる新たな「アートの森」へと継承されていきます。

このアートの森は、従来の意味での公園とは違う、誰もが利用できる体験的な空間となります。歩行者はこの場所を自由に散策し、アート作品を鑑賞したり、休憩したり、安全に遊ぶことができます。

通過のためだけでなく、地域の人々と訪問者が日常的に出会い、時間を過ごす場へと変化します。

アート作品と自然は一体となって風景を形成し、作品は独立したオブジェとしてではなく、この空間を構成する一部として存在します。これからミュージアムロードを散策する人々の歩みを緩やかにし、好奇心を喚起し、気分を高めてくれる場所となります。自動車の往来がなくなることで、環境は感覚的にも落ち着きを取り戻します。音環境や空気質、空間のリズムは歩行者のスケールへと調整され、滞在、遊び、都市生活を支える、安全で自由な公共空間が生まれます。



●エリア2
JR灘駅～阪神岩屋駅

王子公園のある北側から続くアートの森は、JR灘駅まで途切れることなく変容し、続いてミュージアムロード全体の中心となる灘駅南側からは浮かぶアートの森として8つの展開を広げていきます。

この浮かぶアートの森は、ミュージアムロードの北側と南側を結びつける存在であり、単なる移動のための中間空間ではなく、滞在のための場としても計画されています。

北側のアートの森はデッキを介して南側へと途切れることなく連続し、これまでエリアを分断してきた物理的・体験的な境界を解消します。

灘駅の①駅前広場では地形の一部のように緩やかに立ち上がって浮かび、往来する電車もその一部として溶け込みます。

駅前広場と一体的に機能する①駅前広場は、滞在や出会い、文化的活動のための場であり、移動と滞在が自然に交差する空間となります。

案内所となる施設を設け、はじめて訪れる人にもわかりやすい、散策のはじまりの場所となります。

ここを起点にアートの森はより都市的で社会的な性格へと変化し、人の集まりが増えるとともに、点在するアート作品の役割も強まります。

ミュージアムロード全体をつなぐ森として機能し、訪れる人々を迎え入れ、滞在させ、送り出す空間となります。

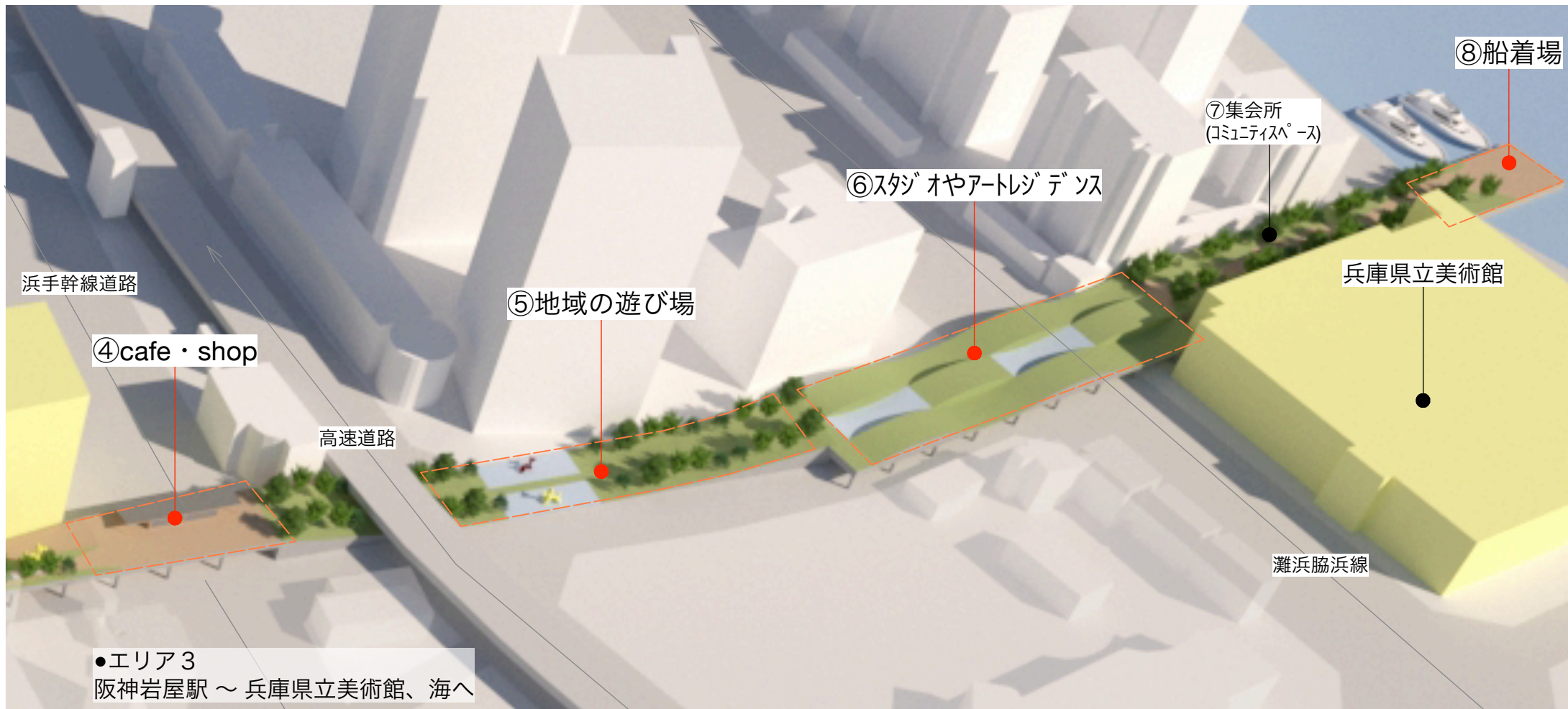
岩屋駅付近の③のエリアでは森が大きく緩やかな階段状になり、駅前に小さな広場を形成します。ここは見た目にもわかりやすく、移動、滞在、イベントが自然に重なり合う、集まりの場となります。



①駅前広場イメージ



③駅前広場イメージ



●エリア3
阪神岩屋駅～兵庫県立美術館、海へ

灘駅を起点とした時、ミュージアムロードの最終区間は岩屋駅から兵庫県立美術館へと続き、さらにその先の海へと至ります。ここではルート全体の雰囲気が変化し、アートの森は幅を広げ、人々を受け入れる大きな風景として開かれていくことを想定しています。集まって過ごしたり、イベントが開かれたり、さまざまな活動のための余白のある場所となります。

阪神岩屋駅を過ぎ、BBプラザ美術館付近の④のエリアあたりからは、十分な広さを確保し、大規模なイベントにも対応可能な開放的な空間へと展開します。ここにはカフェやレストラン等の、ゆっくり滞在ができる施設を想定しており、休憩のためのスペースとなります。

⑤～⑦のエリアは、例えば子どもたちがアート作品の中で体を動かして遊べるような空間になっていたり、スタジオやアートレジデンスとして、制作のための場所や、小さなギャラリーやお店、ワークショップができるような空間が集まっていたり、自由度が高く柔軟に対応できるエリアとなっています。ミュージアムロードが、アートを鑑賞したい人々だけでなく、これから芸術の世界に挑戦する人々のための場所となり、ここから新しい文化が築かれていくことを期待しています。

また、この地域で生活する人々にとっても、そういった文化が身近に、日常の中に溶け込むこととなります。集会場・コミュニティスペースとして、北側のエリアからいくつか設けている場所は、地域の人々の利用をメインとしており、町の公民館のような役割をアートの森の中に取り込むことで、ミュージアムロードが誰にとっても開かれた空間となることを想定しています。



⑧の方向を見たイメージ



⑤遊び場イメージ

アートの森は、県立美術館の拡張された公共空間として、時間を問わず利用されることも想定しています。展示内容と関連したイベントやワークショップなど、さまざまな展開を想定しています。

美術館はこのエリアの象徴的なランドマークであり、訪れる人の目的地として機能しますが、ミュージアムロードはそこで終わりではありません。

⑧のエリアは船着場を想定しており、ミュージアムロードが美術館を越えて海へと続き、より広い風景と、その先に広がる世界へとつながっていくことを意味しています。

たくさんのアートに触れる散策を終え、海と夕日を眺めながら1日を振り返り、そこから得た感動やインスピレーションを噛み締める、そんな豊かな時間を過ごせるアートの森を提案します。